# 琵琶湖博物館の研究をふりかえる

琵琶湖博物館　研究部長　高橋啓一

安曇川で発見された足跡化石を地域の研究者、住民といっしょに調査する

## よくばりな博物館

みなさんは、どんなときに博物館に行きますか。旅行にいったときに、その地域がどんなところであるのか知るには博物館は最適ですね。何かの調べものをしていて分からないときにも、テーマがあっている博物館は使えそうです。家族や友達とどこかに行こうかというときに、たまには博物館でもいってみるかということもあるでしょう。

博物館へ行く目的は人ごとに違います。そこで、琵琶湖博物館はさまざまな目的の人が来てもできるだけ満足してもらえるような博物館にしようと計画したのです。琵琶湖博物館の設置目的には、つぎのように書かれています。琵琶湖博物館は、「研究施設であり、文化施設であり、生涯学習施設であって、交流と情報のセンターとして機能するものである」。なんて、よくばりな博物館なのでしょうか。

このような、多機能な性格を持った博物館の中で、私たちが最も基礎的な機能であると考えたのは、研究機能です。展示や講座、観察会などの博物館活動を充実させ、新しいものにしていく原動力として研究や調査なくしてはありえないからです。

このために、高度な知識や技術を持った30名以上の学芸員を全国から、あるいは県の行政で実務を担当している人たちの中から集まってもらい、準備をし、開館したのです。そして、展示や博物館活動のいろいろな面で全国から注目されるような博物館ができました。10年たった今でも、年間40万人以上の人がくる博物館は、国内ではまれといえるでしょう。

## 研究施設としての博物館

博物館が開館してからは、それまでの博物館づくりの活動から、研究と日常の博物館運営の両方を行う活動に代わっていきました。研究活動は、総合研究、共同研究、専門研究という3つのカテゴリーの研究を組み合わせて進めてきました。

また、研究能力を向上させるために、学芸員の研究内容を紹介し互いに批判しあう研究セミナーを開催したり、研究集会や学会に参加して最新の情報を収集する努力をしてきました。こうして生まれてきた研究成果は、これまで学術論文や琵琶湖博物館の研究報告書で公表したり、企画展示、研究発表会、講座、講演、一般書などでできるだけわかりやすい形で発信してきました。

こういった研究成果はもちろん次の展示更新や企画展示などをつくる材料となり、文化施設としての博物館機能の充実につながることでしょう。

しかし、それだけでは、研究施設としての博物館機能としては十分とはいえません。活発な研究や調査によって琵琶湖地域の自然や文化の価値を次々に掘り起こして行く活動、そしてそれが地域的な題材ではあるが、世界の人が注目するような成果につながることが研究施設としての博物館には求められています。琵琶湖地域にはその題材が豊富にあるのです。

## 共に研究を進める

琵琶湖地域の自然や文化を掘り起こし価値を見つける仕事は、琵琶湖博物館の学芸員だけでできるものではありません。すでに地域の中にそういった研究を続けている人たちもいます。私たちはそういった人々といっしょに研究を続けていきたいと考えています。また、新たにいっしょに研究を始めたいという人たちが、琵琶湖博物館の研究に参加できる仕組みを作りたいと思っています。

それぞれが持っている技術や知識、情報を持ち寄って、琵琶湖博物館の学芸員が、地域の人が、他の機関の研究者の人たちも、そして海外の人たちも、皆が琵琶湖博物館を拠点としてこの地域を研究していくことができないかと考えています。研究へさまざまな人が参加でき交流することがこれからのさらなる地域の価値の発見につながっていくと考えています。開館して10年、琵琶湖博物館の研究機能は次の一歩を進み始めています。